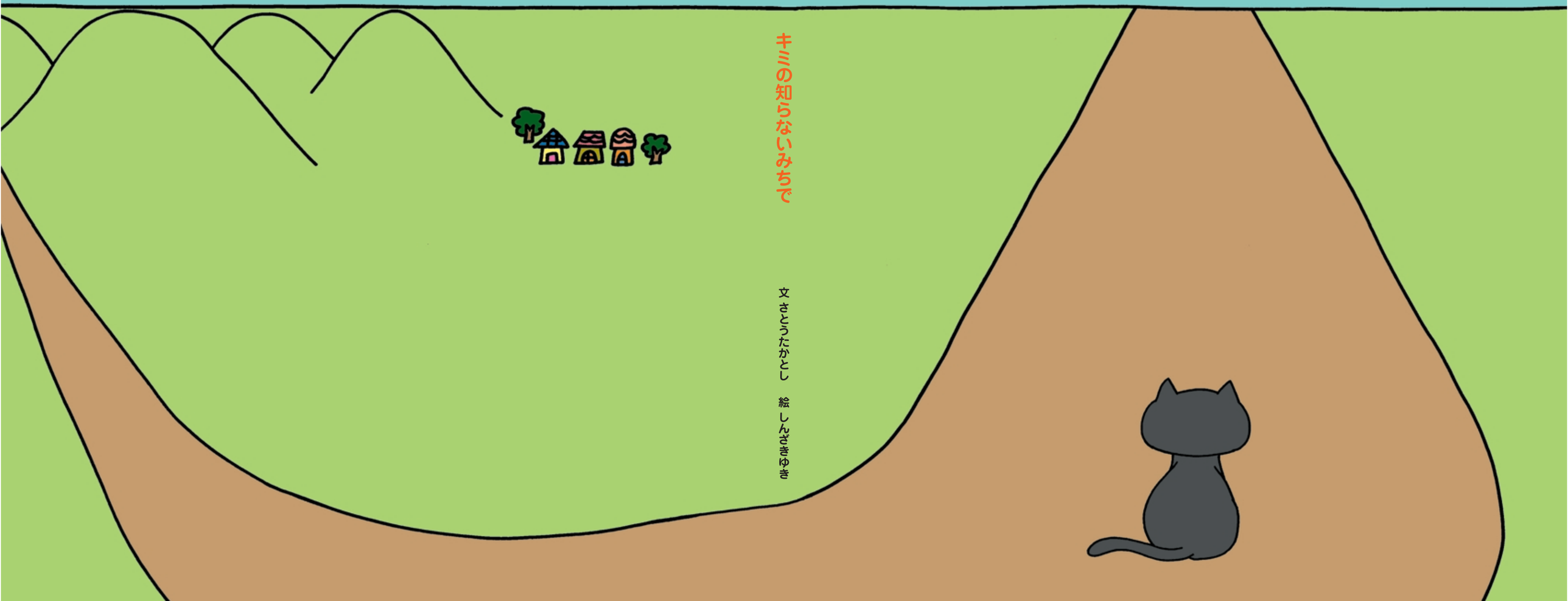
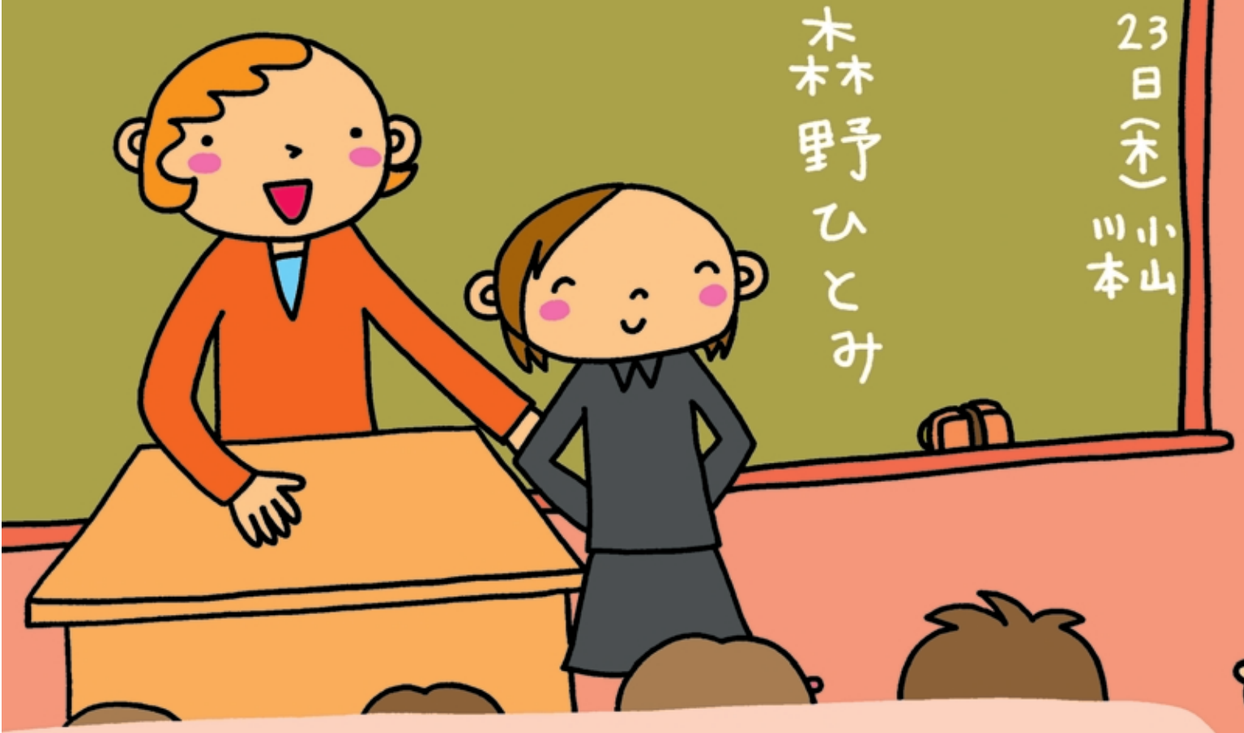
キミの知らないみちで

文　さとうたかとし　　絵　しんざきゆき



キミの知らないみちで

文 さとうたかとし　絵 しんざきゆき

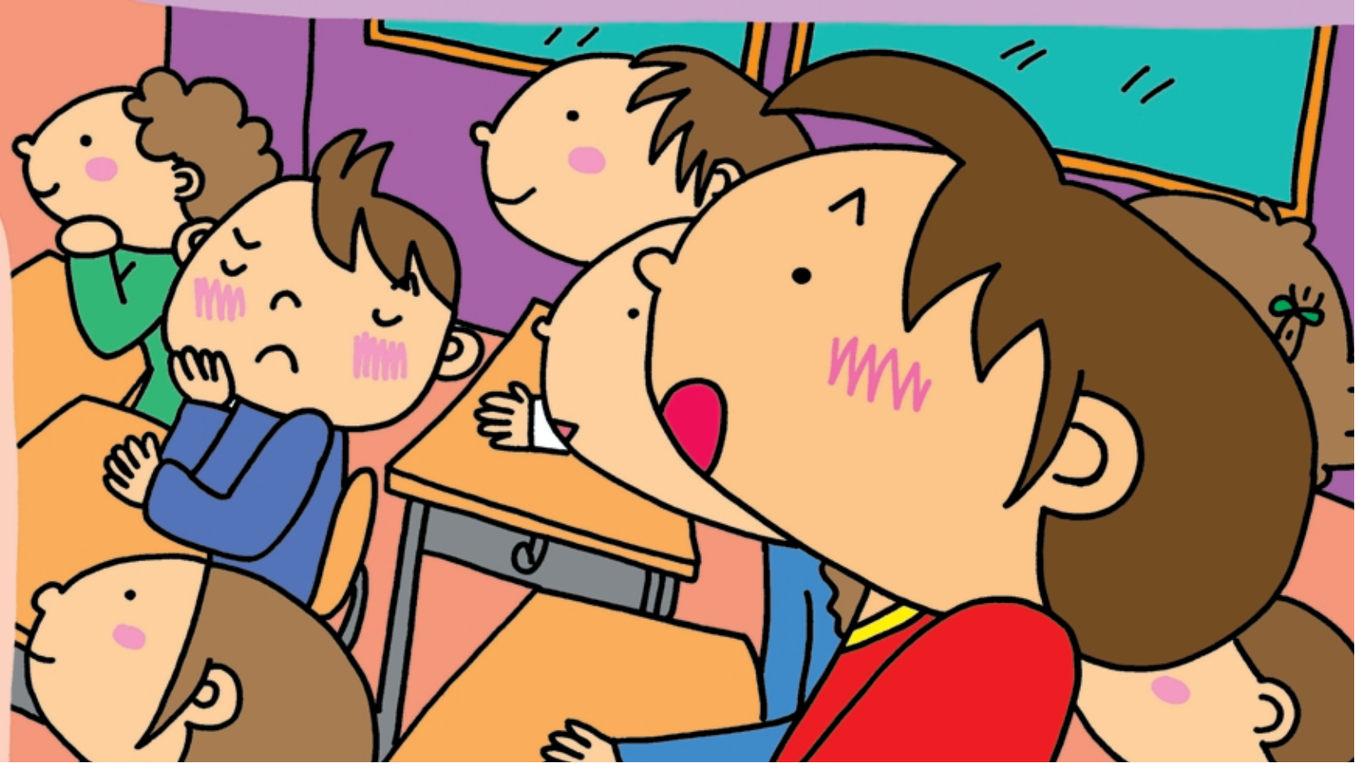


「みなさんに新しいお友達を紹介します」　ななめに光が差し込む朝の教室で、先生はいつもより大きい声で話しはじめました。朝一番のビッグニュース!　転校生です!!　はじめて見る女の子を前にして、きのうの夜おそくまでゲームをやっていたせいで頭の中がモヤモヤしていた時夫も一気に目がさめました。

背の高い女の子はまっすぐ背すじを伸ばして、「はじめまして、森野ひとみです」とはっきりした声であいさつし、いたずらっぽくニコリと笑いながら教室を見渡しました。時夫はそのとき、その子と目が合ったような気がしていっしゅんドギマギしてしまい、思わず下を向きました。(きれいな子だなぁ。でもなんであんなに落ち着いているんだろう･･･)　たしかにフシギなかんじの女の子です。着ている服は靴下から上着まで黒一色。しかも、その服は何かツヤツヤ光る生地でつくられているようでした。

「森野さんは信号がひとつしかない静かな村から引っ越してきたのよ。まだまちにきて間もないからみんないろいろ教えてあげてね」　そう言うと先生は教室を見まわし、時夫の顔をみつけてほほえみました。「東時夫君のとなりの席が空いているから、そこに座って」(ええっ!)　おどろく間もなく、ひとみがちかよってきて、「時夫クン、よろしく」とほほえみました。「あ、ああ」　時夫はあわててそう答えるのがやっとでした。

一時間目は時夫の苦手な作文でした。先生は黒板に大きく“お父さん、お母さんのお仕事”と書きました。「もうすぐ勤労感謝の日ですからね。昨日も言いましたが、お父さんやお母さんの仕事をわかりやすく、そして感謝の気持ちをこめて書いてください」　その先生の言葉に、(あああっ、お父さんは、たしか「“みち”とか“まち”のことを考える仕事」だって言っていたけど、道路とかまちの何を考えるのだろう?もっとちゃんと聞いておけばよかった)と時夫は心のなかでこうかいしました。



けっきょく、時間内に書き終われなかったため、作文は、最悪のパターン「宿題」となってしまったのでした。（ちぇっ、宿題かぁ、ゲームする時間ないかもな･･･）　がっかりしながら帰りみちを歩いていた時夫は、ふいに耳もとで「時夫クン!」とさけばれ、思わずつまずいてしまいました。
ふりむくと転校生の森野ひとみがドキッとするほど近くにいます。「時夫クン、作文書けた?」「なんだよ。まだだよ。森野さんは?」「ひとみでいいわよ。前の学校でもそう呼ばれていたし。それよりねえ、うちにこ

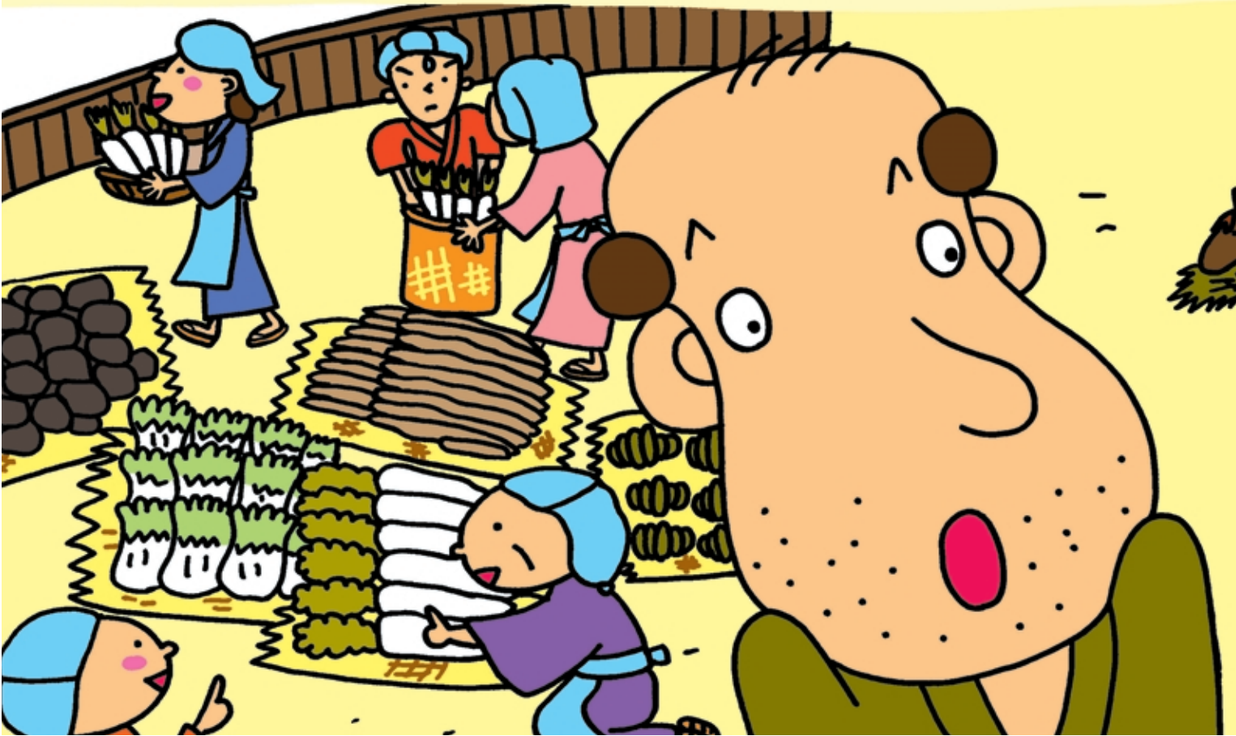
ない?　今日できた友達は時夫クンだけだから」（ええっ!女の子のうちに?）「きっとお母さん、美味しい手づくりのおやつ用意してくれるよ。それにゲームもあるよ」（手づくりのおやつにゲーム･･･!!）
「これ、家までの地図だからね。わたし先に帰ってお母さんに話しとく。絶対きてね!」　ひとみは時夫の手に地図をつかませると、チラッと笑って、すばやく走り去ってしまいました。渡された地図はなんだか古くさい感じでした。紙も黄ばんでいます。（なんか変だなぁ）と思いながらも、家に帰った時夫は好奇心に負けてしまい、「友達の家に行ってくる」とだけ言って、ひとみの家に向かいました。

ひとみの家は思ったよりも遠いようです。いつもの通学路から脇道に入り、林を抜けなければなりません。
時夫が林に入ってからのことです。気づくとまわりの景色が見えなくなるほど、霧が立ちこめてきました。時夫はすっかりこわくなり、みちをひきかえそうとしました。そのときです。「ニャー」という声とともに一匹の黒猫が霧の中から現れました。その黒猫は、時夫を一目見ましたが、ふりかえって先に行ってしまいました。時夫は勇気を出して、黒猫が行ったみちを進むことにしました。やがて、霧の向こうにまちがうっすらと見えてきました。しかし、まちに入るなり時夫はビックリしました。そこはまるでテレビの時代劇に出てくるようなまちなのです。気がつくと、変わった服を着た子供がじっとこちらを見つめています。時夫が「森野さんの家に行きたいんだけど」と言うと、その子供は「ああそれなら」

とついてくるようにしぐさをしました。子供の背中を追いかけて進むみちは、ふだん歩いているみちとは違って小石をふみかためた上に砂がまかれただけです。（ああこんなみちじゃあ、新しくおろしたばかりのバスケットボールシューズが汚れちゃうよ･･･）と思わず足元を見た時夫は、「あっ」と声を上げました。
自分がいままではいていた靴がワラジに変わっていたのです。靴だけではありません。自分が着ている服も、前を行く子供と同じ着物に変わっていました。（これは夢？　夢ならさめてくれ！）　時夫は夢からさめようと、ほっぺたをつねったりムリヤリ目を大きく開いてみたりしましたが、だめでした。どうやら別の時代にタイムスリップしてしまったようです。（なぜ？　あの森野ひとみのせい？　よくわからない。わからないけれど、そんなことより、とにかくなんとかしてもとの時代にもどらなくては）と時夫はあせりました。

「ここだよ」と案内されたのは大きなやしきでした。広いしきちにはたくさんの馬がつながれています。その馬を世話している男のひとりに、「ひとみさんはどこ?」と時夫がたずねると、「そんな名前の人はこの本陣にはいないな」と突っぱねられました。

“ほんじん?” どうやらこの大きなやしきはほんじんと呼ばれているようです。そこで思いきって「ほんじんってなに?」と聞いてみると、男はあきれた顔をして話しはじめました。「本陣ってのはなぁ。おとのさまが旅の途中で寄るところよ。参勤交代って知らないのか? 全国各地のおとのさまはな、江戸と自分のお国にだいたい一年ごととか三年ごととかに交互に住むことになっているわけよ。だからおとのさまの多くはこのみちを通ることになる。江戸から京都まで二週間はかかる長い旅の道中で、いくつかの宿場に立ち寄るのだが、その中でおとのさまがお泊りになるやしきが本陣ってわけだ」 時夫はぼんやりうなずきました。



「そうだ坊主。こんなところにぼけっとつったっているんじゃない。はやくみちの掃除にいけ。うちの村の掃除丁場(※掃除の受け持ち区間)はほかの村より長いから、一人でも多くてつだわなきゃならんのだ。おとのさまが着くまでもう半日もない。なんたって三十万石のおとのさまの江戸への参勤なんだから、失礼があっちゃならん」

時夫はせきたてられるように門の外に追い出されると、掃除をするためにかけ出しました。

時夫がみちの掃除を終えて本陣に戻ろうとすると、「脇へ、脇へ。おとのさまのご到着なりぃ〜」と大きな声が聞こえます。やがておとのさまが本陣に入り、あたりはほっとしたふんいきになりました。行列でカゴをかついでいたかつぎ屋たちも、地べたにすわり、ワラジを脱いで足をなげだしています。

「ほんとにまあ、大変だな。毎年毎年なぁ」とまちの人が声をかけると、かつぎ屋の一人が答えました。「ほんとなあ。まあ、お国にとっては大変な出費だがな。ただ、この行列も、宿場には感謝されているけどなぁ」「そういえばそうかもしれんなぁ。なんたってお金が落ちるからなぁ」「お金ばかりじゃねえ。江戸のはやりものだって行列が運んでくるんだ。たとえばこんなん知っているか」　男はそう言いながら、ふところからなにやら黒っぽい紙をとじた本をとり出しました。「これは『道中記』だ。江戸でたいそうはやっているんだぞ」　時夫はまちの人といっしょにその中をのぞきこみました。そこにはまちの名前、名産品などが絵入りで書かれていました。（ははあん、これは「旅行ガイドブック」だな）　時夫はそう思いつきました。

「なんたってお伊勢まいりはすごい人気でな。江戸の町民も、お伊勢まいりなら旅が許されるから、みんなして伊勢に行きたがるんだ。でも、みんなが伊勢神宮さまに行きたいのかって言うとそうじゃない。お伊勢さまにはほんのちょっと寄るだけで、実は旅の目的はその途中の楽しみにあるんだからなぁ」（そうか、この時代は自由に旅行ができないんだな）

時夫はこの時代の旅のことを思い浮かべました。何日も何日もかけて歩いて行く旅。泊まるまちではそのまちのおいしいもの、めずらしいものを食べ・・・（のろいけど、それだからこそ楽しいのかもしれないな）　長い旅行をしたことのない時夫は、旅に出る江戸の人々のウキウキした気持ちを想像して少し楽しくなりました。

「小僧も旅に出たいか」　道中記を食い入るように見ていた時夫は、かつぎ屋に肩をたたかれて、ハッととびあがりました。（ここにいてももとの時代にもどれるチャンスはない。だったら!）「うん、旅に出たい」　かつぎ屋は笑って時夫の頭をぽんぽんとたたき、「親を悲しませちゃいかんな。まあ大人になったら自分でお伊勢まいりにでも行くんだな」と言って、かたづけをはじめようとしました。時夫は「ボクはひとりぼっちなんだ。つれてってよ。おねがい!」と必死にたのみました。かつぎ屋は、だまって時夫の目をのぞきこみました。「それじゃぁつれていってやろう。今夜おれはあいぼうとこのカゴを前のまちまでもどす。それに乗っていくか」　こうして時夫は生まれてはじめてカゴに乗って夜のみちをゆられていくことになったのです。

「いてっ」　ゆれるカゴの中で時夫が頭をぶつけて声をあげると、すかさず「小僧、静かにしろ」と外からしかられます。（静かにしろって言われたって…うわわわっ）　時夫はカゴにしがみついていましたが、カゴがかたむいたしゅんかん、心臓がとまりそうになりました。手にやわらかいものがふれたのです。こわごわ、カゴのすみの暗がりに目を向けると、光る二つの目が時夫を見つめていました。

そのとき頭の中で声がしました。（おどろかないで。だいじょうぶ。私はあなたの味方よ）　目をこらすと、二つの目は黒猫のものでした。どうやら、声の主は黒猫のようです。（わたし、さっき林の中のみちであなたに会ったわ）（あれれっ　ボクどうしちゃったんだ！　猫語がわかるような気が・・・）

「そうよ。わたしたち、今、話しているのよ。わたしのことアイって呼んでね。光る“目”の“アイ”よ」　黒猫はこんどはハッキリした声でそう言うと、時夫にウィンクしたのでした。しばらくすると、カゴがとまりました。

どうやら休憩のようです。そのとき、アイはすばやくカゴから飛びおり、くらやみの向こうから「ニャー」と鳴いて時夫を呼びました。時夫はそれに誘われるように走りだしました。がいとうのないまっくらなみちを、アイはしっぽで時夫のつま先にふれながら、みごとにみち案内をするのでした。

やがて雲の隙間から月が顔を出しました。（月明かりってこんなに明るいんだ・・・）と時夫はおどろきました。その夜は川の近くの小屋にもぐりこみ、ワラにくるまって眠ることにしました。

夜が明けるとあたりはだんだん、そうぞうしくなってきました。大きな荷物をかついだ男たちが、渡し舟の船着場に集まっているのです。「みんな何をかついでいるんだろう」　アイは鼻で風のにおいをかぐように首を持ち上げ目を細め、そして鼻をならしながら言いました。「あの荷物は魚ね。たぶん塩づけした魚だわ。これから船に乗るのね。あっちは野菜かな」「なんでわかるの？　やっぱり鼻がきくから？」「そうね。でもそれだけじゃないわ。この時代はクール便なんかないでしょ。だから山に住んでいる人は、海から運ばれてきた塩づけされた魚を手に入れるしかないの。そのかわりに海ではとれない山菜やたばこの葉っぱと交換するのよ」

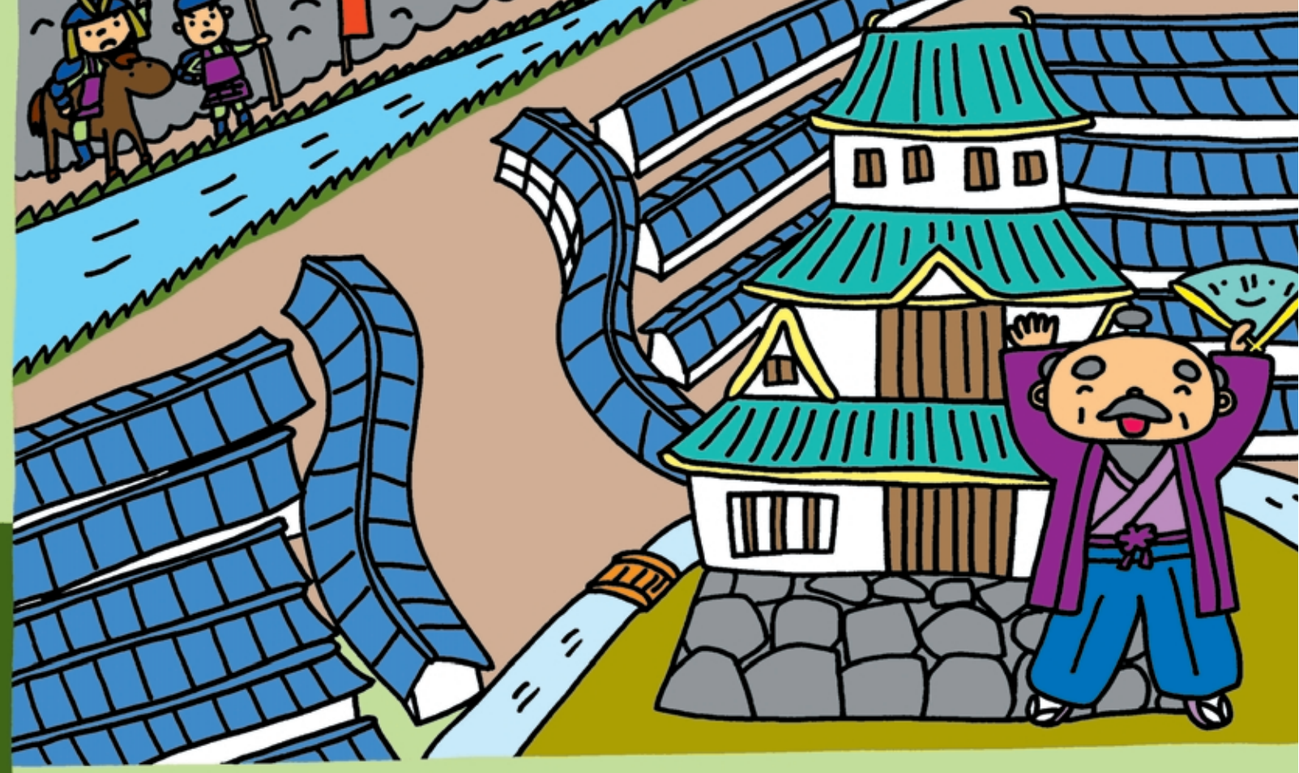
今度は大きなふくろを積んだ牛が目の前を通りすぎました。「あれはたぶん塩ね。塩がないとどんな動物も生きていけない。人間も、もちろん猫もね。塩はとても大切なのよ。山の村では、魚と同じように、海から運ばれてきた塩を買うしかないの。だから塩はむかしから、なんどもなんども同じみちを通って運ばれ続けてきたのよ」

船着場では人々がつぎつぎに渡し舟に乗りこんでいきます。時夫もアイを船着場の横でひろった古いカゴに入れて乗りこむことができました。「時夫クンのいた時代だったら“ペット乗船手続き”がいるかもね」とアイは小さく笑いかけました。（時夫クン？　その呼び方は、どこかで・・・）

時夫が何かを思い出そうとしたそのとき、船は大きくゆれて、岸をはなれていきました。「今日は流れがはやいからな。みんなしっかりつかまっててな」と船頭の声がします。「でもどうして橋がかかってないんだろう。これじゃあ不便だし、危ないよぉ」　時夫は早くもはじまった船酔いを忘れようとして、アイに話しかけました。「もちろん、むかしから橋はかけられていたわ。でもわざと橋をかけなかったところもあるのよ」「えええ、なんでぇ！なんでわざと、橋をかけないんだよぉ」　だんだん気持ちが悪くなってきた時夫は、うらめしく思いながらつぶやきました。「それはね・・・」とアイが説明しようとしたとき、時夫は「もうだめだ」とさけび、水の中に吐こうとして舟のへりから大きく身をのりだしました。「危ないっ」船頭が大声を出したしゅんかん、舟のゆれとともに時夫とアイは川の中に投げ出されてしまいました。

流されながらも時夫は、アイがおぼれないようにカゴをしっかりと抱きかかえていました。しかし、だんだん手がしびれてきて、とうとう力つきそうになりました。（こんなところで死にたくない）　時夫が強く思ったそのとき、カゴが川から突き出ていた岩にあたって、運良く浅瀬にたどり着くことができました。ずぶぬれの時夫とアイはなんとか岸にはいあがりました。「助かったぁ」「うんニャン！」　二人はしばらく岸でからだをかわかそうと横になりました。お日さまがまぶしく、ありがたく思えました。しばらく休むと、やっとしゃべれるようになりました。

「でも何で橋をかけないのかな。やっぱりあぶないよ」「そうね。橋をかけなかったのは、江戸を守るためなの。いざというとき敵が川をわたれないように、橋をかけないようにしていたのよ。でも、そのうち平和な世の中になったので、みちを新しくつくったり直したりして全国と江戸とをスムーズに結べるようにしたの」「ふうん。みちがちゃんとできたおかげで、全国のおとのさまからまちの人まで、たくさんの人が旅行できるようになったのか」「旅行だけじゃないわ。物だって運



べるようになったわけでしょう」「魚とか、塩とかもね」　時夫はこれまで見てきたことを思い出してうなずきました。「人や物だけじゃないわ。ニュースだって、はやりものだって、みちを通って運ばれてくるし、運ばれていく。これからは多くの橋がかけられ、もっといろんなものがみちを通っていくはずよ」　アイはうれしそうにほほえんで、こうつけたしました。「昔からみちが通る村の人たちは、みんなでみちを掃除したり、でこぼこを直したりして人や車が通りやすいようにしてきたのよ。時夫君が住んでいるまちでも、みちがでこぼこすれば夜中に工事をして朝にはきれいになっているでしょう。これはね、みちは人間の生活に大きな役割をはたしているから、みんなでみちを大切に使って長持ちさせているのよ」「うんわかった。だからみちは途切れることなく、まちとまちを結び続けているんだね。じゃあ、これからいくみちも東京、いや江戸に続いているのかな」「そうね、でもまず、そのみちを探さなきゃね」　現実にひきもどされて、時夫とアイは思わずだまって見つめ合いました。そのとき、風にのって、笛やタイコの祭りばやしが聞こえてきました。

「あっちだ!」時夫とアイは思わず立ち上がりました。まちは思ったより近いようです。

祭ばやしにさそわれるように、大きなカゴをかついだ人びとが歩いていきます。よっぱらってじょうきげんな男たちもいて、そのうちのひとりが時夫に声をかけてきました。「おう、おにいちゃん!祭りに行くのかい。だったら早く行ったほうがいい。みこしが出ちまうからな」「おみこしが出るお祭りなの?」「何を言ってるんだ。みこしがでない祭りなんてあるかい!だいたい祭りっていうのは、神社のみこしと山車をその通りみちでお出迎えするためにあるんだからな」(ボクの近所のお祭りなんかは、おみこしは出ないけどなぁ…)と時夫が考えていると、「もともとのお祭りって神社の儀式だったのね。それがだんだん、楽しむことが大きくなってきたわけ。場所も、神社とかみちだけだったみたいね」とアイが教えてくれました。「みこしもいいけどな、“市”もたつからな。早く行かないといいもんなくなっちまうぞ」　男は笑って時夫たちを送り出しました。祭り! 市!!… 時夫はなんだかワクワクしてきました。

まちにつくとみちの両側にはムシロをしいたり、台を置いたりして、大小さまざまな店がぎっしりならび、客ひきが声をはりあげています。その売りものの種類の多いこと多いこと。泥のついた野菜や、塩づけの魚、とうがらし、のり、つけものなどの食べ物や、なべ・おかま、包丁・カンナなどの刃物、地図、石とうろう、鳥や亀などの動物たちまで売っているのでした。「安いよ安いよ。今朝とれたてのかぼちゃだよ」「魚、さかなっ　塩がきいてる魚」　通りは売り手の声と「安い」「高い」の買い手の声、さらには商売そっちのけでお客とおしゃべりしている笑い声がうずまいて、まるで大きなゲームセンターのようにそうぞうしいのです。

しかも、前にすすむにつれ人がふえ、背中に大きなカゴをかついでいる人たちでいっぱいです。通りはカゴとカゴがぶつかりあって、動くのもままならない状態です。「市ってすごいな。活気があって、いろんなものを売っているんだね。でもほかにスーパーマーケットみたいなおみせがあるんでしょ」「それが、ここよ」そう言ってアイはしっぽで地面をつついて笑いました。「みちがスーパーマーケットなの。みちは人やものが通るだけのところじゃないのよ。むかしから人と人とが出会う場所なんだもの」

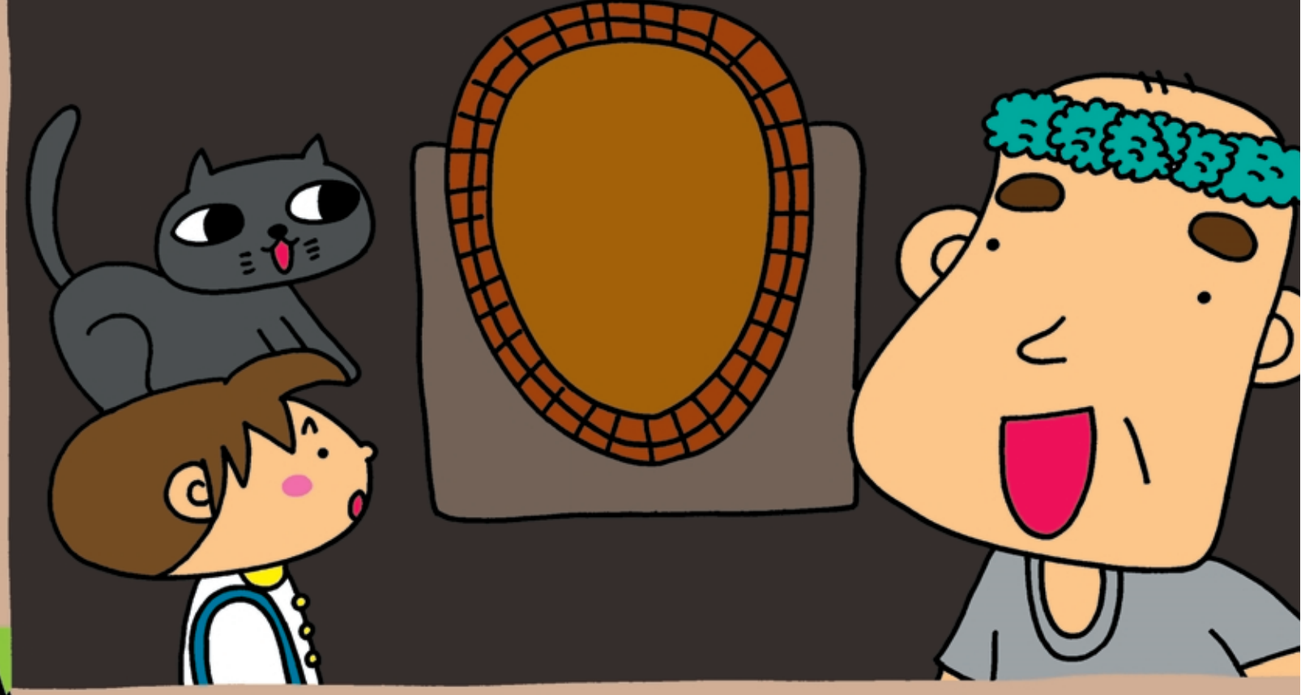
そのとき人ごみの中から男が時夫に声をかけてきました。「その黒猫とこの地図を交換しないか」「何を言うんだ!」と男に向き直る時夫にアイがささやきました。「あの地図、おもしろそうだわ。時間の壁をぬけるヒントがあるかもしれない」「でもそしたらアイは…」「だいじょうぶよ。わたしは」　アイはそう笑って、ウィンクしてみせたのでした。

時夫は心配でしたが、言われたとおり地図とアイを交換し、そして一人さびしく神社まできました。すると突然肩にピョンとアイが飛び乗ってきました。よろこびあった二人は神社の裏で地図を広げました。フシギな地図です。みちには点線が二本せまい幅で書きこまれ、その点線の上に丸印があちこちについています。

「これ、今いる時代の地図じゃないわ」　アイはそう言ってまわりを見まわしました。「あそこに穴がある。この地図の丸印と同じ場所だわ」　アイが見つめる先に、ひとがやっと一人入れるほどの穴があいています。「行ってみましょう」

アイは時夫にかまわず先に穴に入っていきました。「ちょっちょっとまってよ」（猫はこういうとき楽なんだよなぁ･･･）とぼやきながら時夫も、はって穴に入りました。アイは先に進んではふりかえって、二つの目を光らせます。ながくながく、くらやみを進むうちに、時夫は自分がどこにいるのか、なぜこんなことをしているのかわからなくなってきました。

やがて、前方からの光とともに、カツーン!カツーン!と音が聞こえ、ぽっかりと広がったトンネルの中のような場所に出ました。すると、「なんだ坊主。危ないからおりてくるなって書いてあっただろう!」と突然、男から怒鳴られたのです。「工事のじゃまだ。なんたって日本ではじめて下水道をつくっているんだからな」　見ると、トンネルは長く続き、足元には太い



管がころがっています。（ははぁ、どかんだな）（あの地図の点線はこの管だったんだわ）とアイも声を出さずにこたえました。でもよく見ると、どかんの切り口はまんまるではなく、なんとたまご型です。

「ひとつヒミツを教えてやろうか」　さっきまで怒っていた男が、得意そうに話を続けました。「この切り口は、水がいつも同じ量だけ流れていくように工夫されて、たまご型になったんだ。しかもレンガでできている」「レンガぁ?」　時夫は声をあげました。

「みちの下は水道管やガス管がうまっている大事な場所なんだから子供に入ってこられると困るんだ」　今度は、奥から出てきた現場監督らしき人に言われとまどう時夫に、アイはそっとささやきました。「水道･ガス･電気などは、人間の生活に欠かせないもの。ライフラインって呼ばれていて、スイッチひとつで使え、私たちの生活にとけこんでいるけど、それらはみちの下を通っているのよ。それが事故や、地震などでこわれてしまうと、みんなはすぐに生活できなくなってしまうの。だから、こわれないようにこわされないように、またいつでも点検や修理ができるようにみちの下に埋めて守られているのよ」

「さぁそのハシゴを登って地上に出なさい。いまごろガス灯に火がつくころだろうから明るいはずだ」とうながされ、時夫とアイはハシゴをかけのぼりました。

こわごわ地上に顔を出すと、そこはなんともモダンでなつかしい感じのまちです。歩く人も着物でなく洋服にステッキを持っています。すると「ハッ　ホッ」とハッピ姿の男の人が、長いさおの先につけた火を使ってガス灯にあかりをともしてまわっています。すこしずつ明るくなっていくまち･･･「電気じゃないんだ」「まだ電灯ができる前だったのね」まちを照らすガスの光はフシギにあたたかく、時夫もアイもしばらくだまって見とれていました。

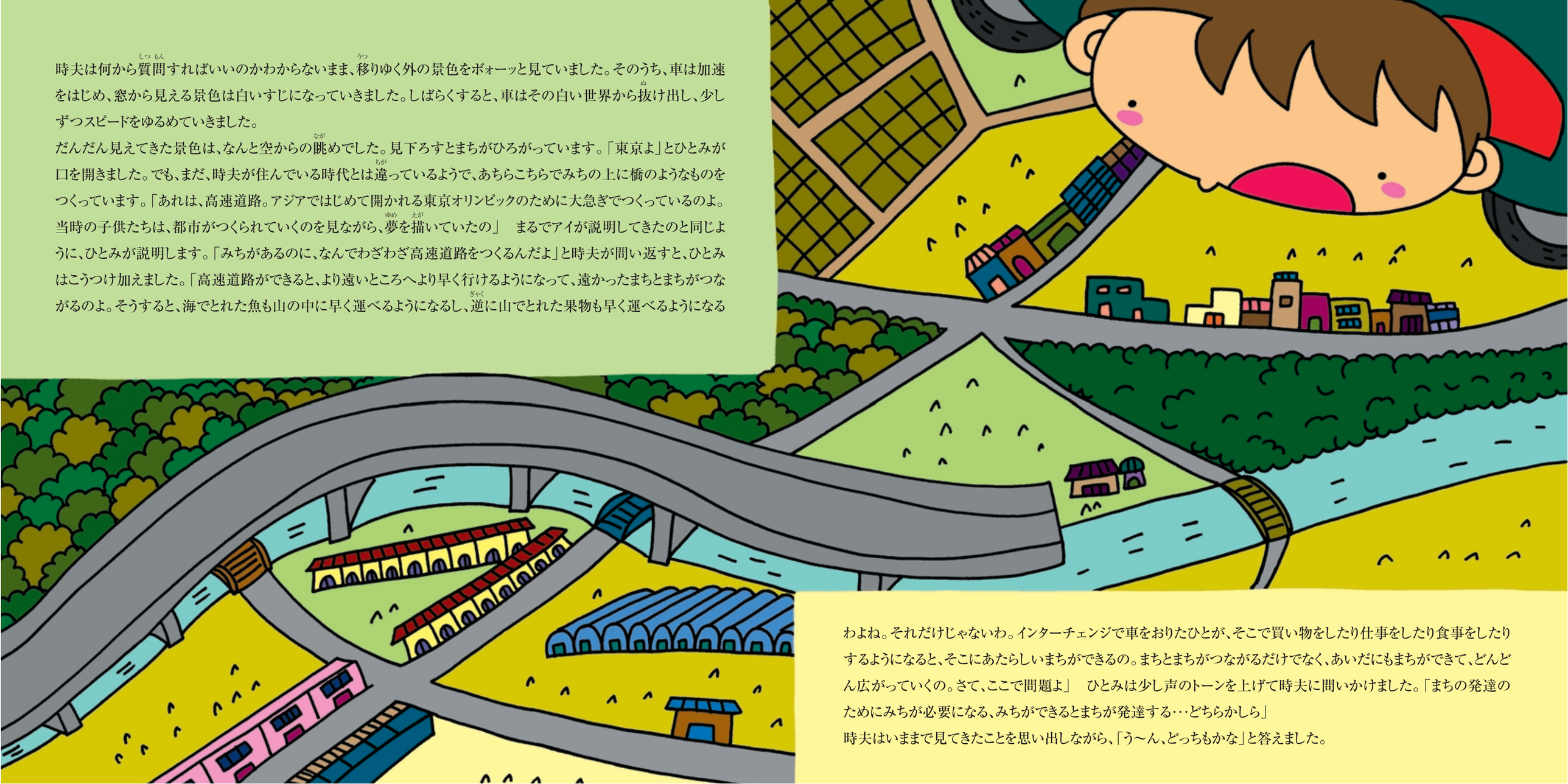
そのときスーッと黒いクラシックカーが目の前にとまり、ドアが開きました。「どうぞお乗りください」　ていねいな女性の声のドライバーをみると時夫は、「アッ」と声をあげました。運転していたのは･･･ひとみだったのです。

「ここからは少しスピードを上げて旅をしてもらおうかしら」　ひとみは、すました顔でハンドルをにぎりながら前を見て言いました。アイはひとみのひざに飛び乗り、時夫も乗り込むと、車は音もなく発進しました。

時夫は何から質問すればいいのかわからないまま、移りゆく外の景色をボォーッと見ていました。そのうち、車は加速をはじめ、窓から見える景色は白いすじになっていきました。しばらくすると、車はその白い世界から抜け出し、少しずつスピードをゆるめていきました。

だんだん見えてきた景色は、なんと空からの眺めでした。見下ろすとまちがひろがっています。「東京よ」とひとみが口を開きました。でも、まだ、時夫が住んでいる時代とは違っているようで、あちらこちらでみちの上に橋のようなものをつくっています。「あれは、高速道路。アジアではじめて開かれる東京オリンピックのために大急ぎでつくっているのよ。当時の子供たちは、都市がつくられていくのを見ながら、夢を描いていたの」　まるでアイが説明してきたのと同じように、ひとみが説明します。「みちがあるのに、なんでわざわざ高速道路をつくるんだよ」と時夫が問い返すと、ひとみはこうつけ加えました。「高速道路ができると、より遠いところへより早く行けるようになって、遠かったまちとまちがつながるのよ。そうすると、海でとれた魚も山の中に早く運べるようになるし、逆に山でとれた果物も早く運べるようになるわよね。それだけじゃないわ。インターチェンジで車をおりたひとが、そこで買い物をしたり仕事をしたり食事をしたりするようになると、そこにあたらしいまちができるの。まちとまちがつながるだけでなく、あいだにもまちができて、どんどん広がっていくの。さて、ここで問題よ」　ひとみは少し声のトーンを上げて時夫に問いかけました。「まちの発達のためにみちが必要になる、みちができるとまちが発達する･･･どちらかしら」

時夫はいままで見てきたことを思い出しながら、「う～ん、どっちもかな」と答えました。



「だ〜い正解」　ひとみは、はじめて時夫に顔を向けて笑顔を見せ、ヒミツを明かすように言いました。「まちとみちの深いカンケイ･･･それだけわかってくれればいいのよ」

車はまたまたスピードを上げ、景色は雲の中に消えていきます。そして再びスピードが落ちてくると、こんどは銀色に輝くSF映画に出てくるようなまちが広がっていました。そのまちは、カッチリと四角いブロックを仕切るようにつくられ、どこもかしこも明るく、暗い部分はありません。するとアイがポツリとさみしそうに言いました。「きれいなまち･･･でもこういうまちにはわたしたちは住めないのよ。あっ、わたしたちって、猫のことね」（たしかにこのまちには猫の居場所なんてどこにもないかもしれない）と時夫は思いました。そう考えると、きれいで、車が走っているだけのみちは、とてもつまらないもののように思えるのでした。

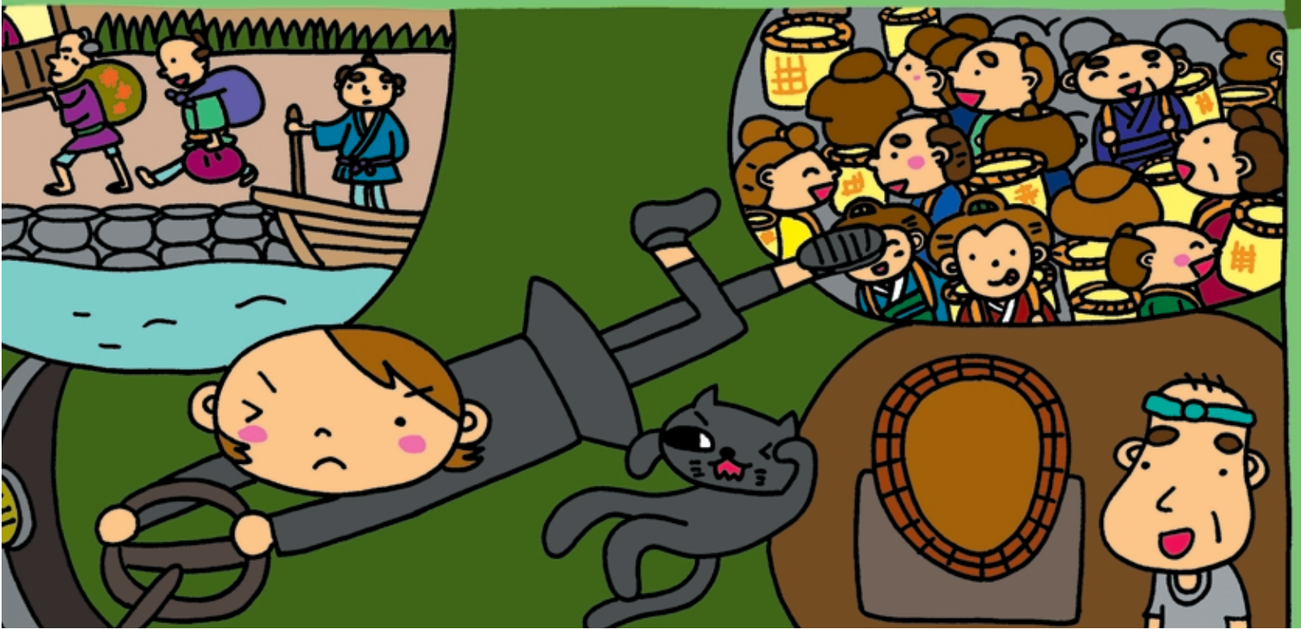
時夫は、人と人がぶつかりあうようににぎやかだった祭りの市のみちをなつかしく感じました。「まちはわたしたちが毎日の生活をしていくところ。目的地に早く着きたい、欲しいものをいつでも手に入るようにしたい、といった便利なことだけを追い求めてみちをつくっていけば、ゆとりや安らぎがなくなり、息がつまってしまうわ。わたしたちの生活には、きれいな空気、木々や花、鳥や動物、それに小さな虫たちなどが身近にいることも大切なの。わたしたちが住みやすいまちをつくるためには人間以外の生きもののことも考えていかなければいけないのよ」とひとみはそっとつぶやきました。

「そろそろおうちに帰ろうかな」　ひとみはそう言って、車のスピードを一気にあげました。こんどは窓の外が白くならずにどんどん暗くなっていきます。あんなに静かだった車内でも、キーンという金属のこすれるような高い音が大きくひびいてきました。窓の外はどんどんどんどん暗くなって、まっくらなやみの中をグルグル回りながら落ちていくようです。

時夫は思わず、ひとみにさけびました。「どこにいくんだよ!」「だいじょうぶよ、もう帰るわ」「どうしてボクをこんな旅につれ出したんだ!」「それは!あなたの!宿題のためよ!」「しゅくだい!??」　目がグルグル回りはじめます。「なんで宿題のためにこんな思いまでしなきゃならないんだよっ」「お父さんのお仕事ってどんな仕事?」（お父さん･･･しごと･･･みちとかまちとか考える･･･）

時夫は、目が回りもうろうとした意識の中で考えます。（仕事のことはよくわからないけど、みちやまちについてずいぶん考えたな）「そうよ。あなたのお父さんは、みちのこと、まちのことを考えて、そして、つくっていく仕事をしているのよ。でもみちとかまちとかは、“仕事をする人”だけが考えればいいってわけじゃないわ」「･･･」「みんなのみち、みんなのまちよ。時夫クン、いままでみちってどう思ってた?」　暗くなる車内で、ひとみは時夫を見つめて言いました。

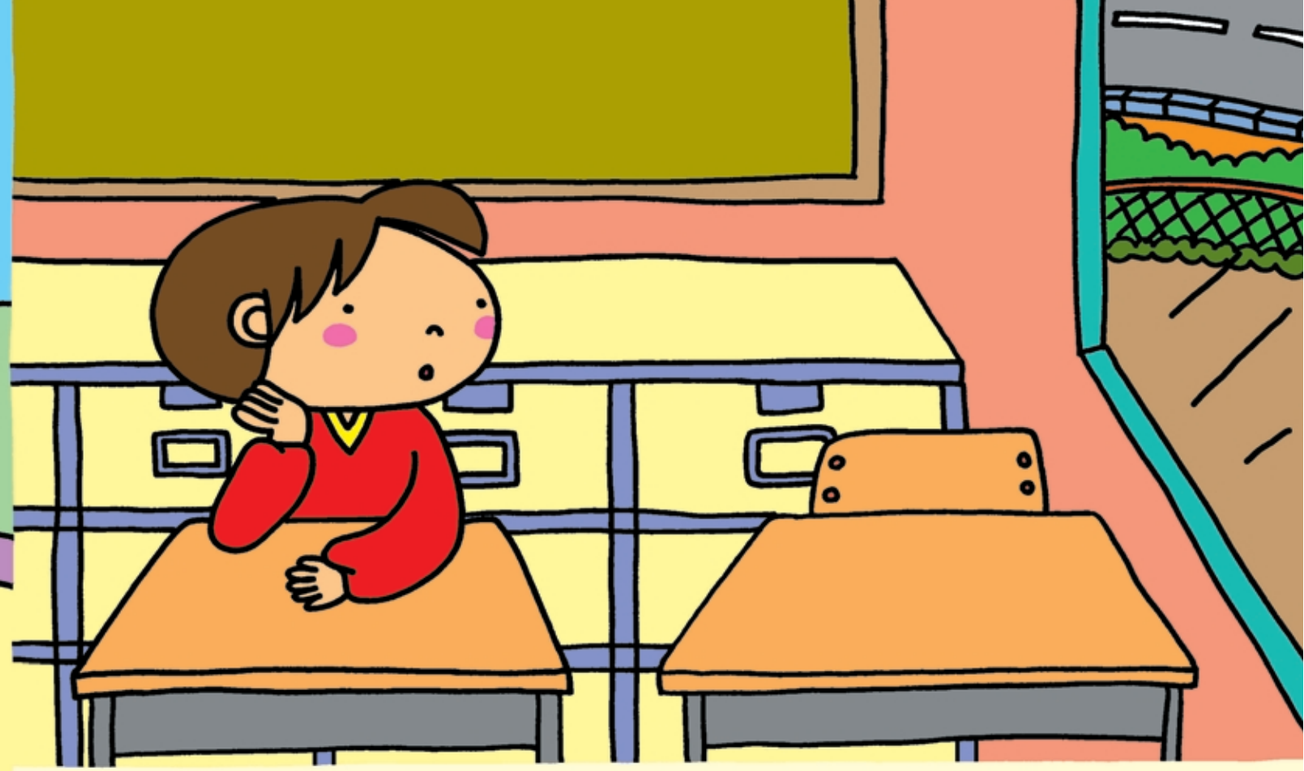
時夫は思い出しました。「みちって、にぎやかな広場みたいなところだった。地下には生活に欠かせない水道やガスも



通っていた」　アイも答えました。「いろいろなものが運ばれてくるのもみちがあるおかげよね」　そしてひとみも「人と人が出会うのも、ね」と続けました。「いままでみちについて、なんにも考えたことなかったな･･･　みちだって橋だってあるのがあたりまえだと思ってた」「時夫クン、みちにゴミすてたことなかった?」「･･･」「みちの掃除も、だれかがやってくれてあたりまえだと思ってた･･･でしょ」　ひとみは笑いながら目でしかるのでした。

「最後にひとつ私からの宿題。時夫クンも考えて。時夫クンは、どんなみちがいいのかしら。そして、どんなまちが好きなのかしら」（どんなみちがいいって･･･　どんなまちが好きかって･･･）　時夫は必死に考えます。（うーん･･･）そのとき車は、まるでジェットふんしゃしたような、ものすごい加速をはじめ、まっくらな車内には、ガガガガガ　という大きな音が鳴りひびきました。時夫は、意識を失う直前、頭の中で、ひとみなのかアイなのか、どちらかわからない声を聞きました。（いいの。どんなみちが、まちがいいか、これからずっと、ゆっくり考えて。それがお父さんからのメッセージなはずよ）　ガガガガガガガガガ　「どんなみちが、まちがいいかって･･･」　ガガガガガ　ガガガガガ　ガガガガガ　ガガガガガ　ガガガガガ　鳴りひびくノイズの中で時夫は聞きかえしましたが、もう、ひとみたちからのこたえはありませんでした。

「起きなさい!学校に遅刻するわよ」　時夫が目をさますと、朝の光がいっぱいにさしこんでいます。
「きのうは帰ってくるなりすぐ寝ちゃったから、お母さん心配したのよ」「ううん、だいじょうぶ。学校行ってくる」　お母さんになんと説明したらよいのかわからず、時夫は朝食もそ



こそこに、家をとび出しました。学校に行くと、時夫のとなりの席は空いたままです。「森野ひとみさんは、急に、いなかにもどることになりました」　朝のホームルームで先生が残念そうにみんなに告げました。時夫は、ぼうぜんとして、ひとみのいた席を見つめました。からっぽの席の向こうの窓からは、いつものみちが見えます。
時夫はひとみに語りかけるように、心でつぶやきました。（みちは昔からずっと続いていて、今のボクらのまちがある･･･そしてみちはその先のボクらの未来に続いている･･･）（そうね）　そのときひとみの声が聞こえたような気がして、時夫は思わずまわりを見回しました。でもそこには、いつもの見慣れた教室の風景があるだけです。
その日みんなは、いつもどおり笑い、いつもどおり遊びました。でも時夫は、窓から見える遠くのみちを、ずっと、ぼんやり見つめていました。